

【当院における免疫染色の精度管理】

◎山形 真祐美¹⁾
長崎大学病院¹⁾

免疫組織化学（免疫染色）とは、抗原抗体反応という特異的な反応を利用し、組織・細胞内の抗原物質の局在を可視化する染色であり、現在の病理診断において欠かすことのできない、極めて重要な技術である。新たな抗体が次々と登場し、その有用性や意義が研究され、実際に診療の現場に反映されてきている。また、バイオマーカー研究の進展により、様々な分子標的薬の開発や適応拡大が進み、同時に適切に治療選択を行うためのコンパニオン診断薬も開発・承認されている。コンパニオン診断薬には免疫染色を利用するものが多々存在し、免疫染色の精度管理の重要性はより一層高まってきている。抗体の種類、染色枚数が増加傾向にあるなかで、どのように精度管理を行い、検査の質を確保するかといった課題に、多くの施設が直面していると思われる。

当院においても免疫染色実施件数は、2020年から2024年で約1.7倍に増加しており、また、MMR-IHC、CLDN18などのコンパニオン診断薬の新規導入も行った。当院では、パンチを使用して、23種類の組織を含むマルチコントロールブロックを作製している。その他複数のコントロールブロックも作製し、可能な限りスライドに、検体とコントロール切片の両方を載せて染色を行っており、現状適切に精度管理ができていると考えている。しかし、コントロールブロックに使用する残余組織検体の安定確保や、希少例に対する特異的抗体といったコントロール確保が困難な染色への対応など、課題はまだ存在する。

本シンポジウムでは、当院における免疫染色の精度管理の現状と課題について概説する。

E-mail : yamagata.m@nagasaki-u.ac.jp
Tel : 095-819-7562